週間地域

全国の地区版から１週間の一押しニュースを紹介

有機野菜を共同輸送

岐阜

流通の効率化へ実証

農家ごと個別で輸送していた有機農産物を、地域で共同輸送して効率化しようとする動きが岐阜県白川町で始まった。有機栽培農家で組織するNPO法人ゆうきハートネットを主体に、輸送ルートや集荷方法を検討。従来の方法を見直し、農家の負担を減らした新たな流通網づくりを目指す。

法人会員数は現在41人。それぞれ個別の販路がある一方、町内の直売所や町外の量販店など共通した売り先もある。法人理事の長谷川泰幸さん（47）は「個別に運んでいた分をある程度まとめたら効率化できるはず」と話す。直売所まで、農家によっては片道20～50分ほどかかる。

2022年度から町内を回る共同輸送の検討を始めた。立ち寄り場所は、農産物の集荷拠点2カ所や同町の直売所を想定。給食センターや豆腐屋も通り、堆肥をつくるための食品残さも回収する計画だ。共同輸送には配送サービスを手がけるダイサンロジタス（名古屋市）が協力する。

1月中旬には、想定したルートを試験輸送。同町内の6カ所を巡り、約3時間で78キロ走行した。同社の浅野大輔代表は「走行距離が長く、コストが高くなる。利用者を増やすなど、立ち寄り場所を増やす必要がある」と話した。

集荷拠点でニンジンを回収して車に詰め込む長谷川さん（岐阜県白川町で）

カボチャ生産を拡大

鹿児島

喜界島で端境期出荷

鹿児島県のJAあまみ喜界島事業本部で、カボチャが園芸作物の一翼を担うほどに成長している。2月に出荷ピークを迎える秋カボチャの面積は2022年度産で1439・9ヘクタールと19年度の808ヘクタールから78％増えた。43戸で生産し、出荷量は100トン、生産額は1億円を超える見込み。温暖な気候を生かして他産地がない時期に出荷し「国消国産」に貢献する。

同事業本部選果場で開いた秋カボチャ目ぞろえ会で、営農販売課の竹下繁樹課長は「今年は県内・国内産とも少ない傾向。昨年より単価も上がっているので追熟した品質の良いものを出荷するよう心がけよう」と呼びかけた。

秋カボチャ品種の多くは「プリメラ」・スペイン語で最上級という意味で、肉質はほくほくとして甘味が強いのが特徴だ。主に関東や鹿児島の市場と鹿児島くみあい食品に出荷される。

園芸振興会の作井猛会長は「好きだからこそ品質の良いものを作りたい。1株につく実は1個。多くは収穫できないからこそ、思いを詰めて栽培している」と力を込めた。植え付け日や肥料の施用日、種類や量などを詳細に記した手帳を見ながら「管理と品質向上に向けた勉強はこれからも続ける」と語った。

喜界島でカボチャを管理する作井会長（鹿児島県喜界町で）

有機カボチャ生産へ

島根

JAしまねは来年度、園芸品目で初めて有機カボチャの試験生産・販売を始める。出雲市と雲南市の生産者5人が合計65ヘクタールで栽培し、出荷量は13トンを見込む。将来的には10トン規模の産地化を目指す。

JAは2022年度からの第3次農業戦略実践3カ年営農計画の基本方針で、国の「みどりの食料システム戦略」の取り組みを重点戦略に位置付け、県やJA全農と有機農業の推進に踏み出した。

うどんこ病に耐性のある2品種を試験生産する。1月下旬には出雲市のJA営農経済本店で講習会を開き、進め方や栽培方法、出荷規格などを確認。県農業技術センターの職員から、有機農業の考え方や有機JAS認証制度などを学んだ。

有機栽培について説明する県農業技術センターの職員（島根県出雲市で）

地元野菜の菓子好評

石川

石川県のJA能登わかばは、地元産の野菜を使ったオリジナル商品「パウンドケーキ」を発売した。水田転作作物として力を入れる西洋カボチャ「くり大将」と、能登伝統野菜「中島菜」の粉末を使用した2種類。「野菜のきれいな色が目を引くし、カボチャの甘味や中島菜の風味が感じられておいしい」と好評だ。

JAは水田転作作物として2021年から、西洋カボチャ「くり大将」の栽培に取り組む。生産振興の一環として、収量増加に伴う規格外品利用に着目。粉末化が可能となったことから、農産物の6次産業化事業としてオリジナル商品開発を企画。カボチャの他、伝統野菜「中島菜」は既に粉末化を実現していたため、これらの野菜粉末を使ってパウンドケーキとして商品化した。

地元産くり大将と中島菜を使った新商品のパウンドケーキ（石川県七尾市で）

「ササニシキ」新ロゴ

宮城

JA全農みやぎは、2023年産で誕生60周年を迎える「ササニシキ」の新しいロゴマークを発表した。今後、新ロゴを活用した商品の開発などで情報発信に努め、一層の生産拡大に取り組む。

新ロゴマークは一般公募で全国から227点の応募があった。最終候補5作品を選び、一般ウェブ投票で9454件の投票があり、大阪府の諏訪えりなさんの作品が最優秀賞に輝いた。

諏訪さんは「このロゴと共に、『ササニシキ』が多くの人に知ってもらえるようになればうれしい」と受賞を喜ぶ。

新ロゴは、「ササニシキ」の「サ」の字と一粒の米を組み合わせ、優しいカラーリングで上品な味わいを表現している。

最優秀賞を受賞した諏訪さん（左から3人目）と関係者。左下が受賞作品（仙台市で）

北海道

サツマイモ菓子販売

セブン―イレブン・ジャパンは、北海道由仁町や栗山町と連携し、サツマイモ「由栗（ゆっくり）いも」を使ったスイーツとパンを道内一部の209店舗で発売を始めた。

「由栗いも」は両町で生産するサツマイモ「ベニアズマ」のブランド名。積算温度の関係で本州より1カ月は長く土の中に埋まっているため、「ゆっくり」育つことと由仁と栗山の一文字ずつを取って名付けた。開発した商品は「由栗いも　もこ」と「由栗いものデニッシュ」。そらち南さつまいもクラブの川端祐平会長は「多くの人に手に取ってほしい」と期待する。

栃木

ニラ出荷調製で研修

栃木県のJAなす南にら部会は、新規部会員を対象に初めて出荷調製作業の研修を開いた。那珂川町の栽培1年目の部会員の作業所で行い、部会員やJA全農とちぎの担当者らが参加し、作業の確認や助言をした。

にら部会は2年間で4人の部会員が加入。新規部会員の悩みや出荷基準を確認し、品質を向上させようと研修の機会を設けた。笹沼英夫部会長は「出荷調製作業で意見を交わし、品質の良いニラを出荷できるようにしよう」と述べた。

長野

競争意識向上が奏功

長野県のJAあづみが運営する大型農産物直売所「安曇野スイス村ハイジの里」で、出荷会員の売り上げが前年より1割増と大きく伸びている。売り上げ点数上位ランキング表掲示による競争意識の向上や、見せ方の工夫などが奏功。売り上げ全体が伸び、「安全・安心な農産物が買える直売所」として地元客に定着してきた。

毎日、「売上点数上位ランキング」を事務所入り口の目立つ場所に掲示する。「見せ方の工夫」を意識する農家も増えた。農家はレシピやイラストを袋に貼るなど工夫を凝らしている。

静岡

広報誌で歴史を回顧

静岡県掛川市のJA遠州夢咲千浜支店で、広報誌で振り返る千浜の歴史展を開いている。同支店は店舗統廃合で24日に営業を終了する。これまでの歴史を振り返り、利用客に感謝の気持ちを伝えようと、中野泰弘支店長が企画した。

JA企画広報課が過去の広報誌を調べ、同支店管内の組合員が掲載されているページをコピーし、提供した。最も古い広報誌は、同JA合併前の1960年代発行の大城農協広報誌で、有線放送実施計画を説明した。

鳥取

白ネギ振興へ研究会

鳥取県の特産白ネギ「伯州美人」の産地振興を目指し「『伯州美人』研究会」が発足した。上旬に米子市のJA鳥取西部白ねぎ共同選果場で発足式を開き生産者や行政、JA関係者ら23人が出席。生産者の増加やブランド力向上などを確認した。

「伯州美人」は、県オリジナル白ネギ品種「改良伯州5号」のブランド名。柔らかく糖度が高いため市場評価が高い一方、風雪などに弱く生産者は少なかった。同会の松尾敏正会長は「次世代につなげるよう取り組みたい」、JAの中西広則組合長は「新しい産地づくりに期待する」とそれぞれ話した。

週間地域面では、全国の地区版で掲載した記事の中から一押しのニュースを紹介します。有料のJA・法人向け日本農業新聞データベースでは、この他にもさまざまな地域の記事が見られます。

©日本農業新聞　無断複製転載を禁じます。